
Blood killer

＊真央＊

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

B l o o d k i l l e r

【Nコード】

N 9 6 7 2 Y

【作者名】

＊真央＊

【あらすじ】

銃で殺す男は笑いだす。
まるで愉快犯のように。

妖艶に微笑む。
まるで花魁のように。

そんな男女達に目をつけられた!?

絶体絶命の俺。(前書き)

初めてのちよいグロ（（笑

さめた目でなく

あたたかい目で見守って下されば

幸いです（（笑

絶体絶命の俺。

「ねえ、殺していい？」

男はイカれた微笑みで問う。

「はぁ!？」

男は相手の言うことをきかず
銃を構える。

「せーの・・・ばん♪」

「ぐはぁ!!!・・・おま・・・え・・・。」

真っ赤な鮮血が周りに飛び散る。

「あ。死んじやったぁー♪」

にたりと薄気味悪く笑みをこぼす男。
それを陰でみちやった俺☆

俺☆じゃねえよ!!俺、テンパっておかしくなった!!

絶対あの男やべえやつだよ!!
銃で殺して笑ってんだぜ?

俺・・・やばくね？
殺されるんじゃない？！？

”ガン”

うっわ！！俺、近くにあったドラム缶けっちまった・・・。

「ねえ、君だあれ？」

「あはは・・・。」

苦笑いしかできねえよ！！

俺どーなんの！？

絶体絶命の俺。 (後書き)

どうでしたか？？

最後まで

あたたかい目をお願いしますーすー (笑)

白いパーカー男は何ですか!?(前書き)

なんかとても

訳わからない・・・。笑

白いパーカー男は何ですか!?

「早く言わないとやっちゃうよ?」

「えーと．．．御月^{みつぎ ゆきと} 優貴斗です．．．。」

「ふーん．．．みちやった?」

すごい笑顔で問いかけてくる．．．のがすつつつつごくこわい．．．。

「い、いいいいいえ。な、何もみておりません。」

「あっは♪じゃあー殺していい?」

「すみません!! 嘘つきましたっ!!!!」

何で俺こんなに弱いんだろ．．．?? (泣)

「ふーん。ま、いいや。おーい!! フェオン!!」

「うーい。」

イカれた男が大声で呼ぶと
なんか白いパーカー男が屋根から
ジャンプしてきてニヤリと不敵に笑った。

「コレ始末？」

「そうしてー♪めんどいし☆」

めんどいし☆で
俺は片づけられたし・・・。

「んじゃ行きます。」

「何を!？」

「風よ。かまいたちよ。今呼び起こせ!！」

俺の質問を無視して
パーカー男は大声をだし空に手を掲げる。

「な、何してんの？」

銃がでたり変なこと言ったり．．．。
なんだよ、かまいたちって．．。

わけわかんねえよー！！

白いパーカー男は何ですか!?(後書き)

私も訳分かりません(笑)

ナンパですか?・・・いいえ、ただの同行です!! (前書き)

ナンパじゃないです (笑)

ナンパですか?・・・いいえ、ただの同行です!!

「あれ? きかない?」

「んなハズないっしょ? ♪」

こいつら何者なんだ・・・?

銃刀法違反にも引っかけられないなんて・・・
んー・・・??

パーカー男は

白いパーカーに青いジーンパン。

髪が茶髪で右耳に紅いピアスをつけている。
見た目は中3みただ。

イカれた男は

普通に長袖Tシャツに黒っぽいジーンパン。

それに茶髪。

見た目は高3っぽい・・・?

「優貴斗くん．．．だっけ？」

「は、はい。」

何だ？何かされるのか！？

「キミ、何者？」

冷たい顔をしたイカれた男が
目の前にいた。

さっきまでは
数メートル離れていたのに．．．。

俺は息をのむ。

「俺は．．．普通の．．．人間．．．です．．．。」

掠れた声で
必死に口から絞り出す。

なんだ．．．？

この圧倒されるような
威圧感。

さっきまではなかったのに……。

「へえ。それにしては……
特殊な体質だね。」

イカれた男は
俺を感心したように見つめる。

「よし、俺と
同行してもらおうか。」

「はい？」

なんで俺は
同行させられるんでしょうか？？

ナンパですか?・・・いいえ、ただの同行です!! (後書き)

遅くなりましたっ

変態ですか？変人ですか？．．．いえ、そういう意味ではございません。（前

サブタイトル長っ！！！

そして更新遅っ！！

変態ですか？変人ですか？．．．いえ、そういう意味ではございません。

「あのー．．．俺
どこに．．．？？」

なんかやみくもに
歩いてる気分なんだけど．．．。
なんだか．．．

全く着く気配がしないというか．．．。

しかも
暗い森林に向かってる気が
しなくもない。

まさか殺されんの！？

”高2男子森林の奥で自殺”

とかで新聞に載りたくないっつー！！

すっげーやだ！！

逃げたい！！・・・のに

パーカー男が後ろにいて

イカれた男が前にいるから

逃げたくとも逃げれない状況に・・・。

「あのう・・・。」

反射的に声が小さくなる。

「なあに？♪」

イカれた男はなんだか

テンションがさっきと変わって

陽気な雰囲気になっていた。

「俺、もしかして・・・。」

殺されるんですか？

と、言う前に声を重ねられた。

「殺されると思った？♪」

「あ．．．はい。」

それはもう完璧に！！

「まあ、キミが普通の人間なら
殺してたね♪」

そんなにこやかに
あっさりと俺の死を告げないでください（泣

ってちょっと待てよ．．．？？

” 普通の人間なら”

ってことは俺は普通ではないと
いうことで．．．。

「普通ではないとは
変態とか変人って意味ですか!?!」

「違うけど?♪」

「す、すみませんっ。」

逆にその微笑みと語尾の
音符が恐怖です・・・(泣

ってかじゃあ

俺は一体何者ですか!?!??

変態ですか？変人ですか？．．．いえ、そういう意味ではございません。（後

何者なんですかね．．．？？

私もよく

理解してません（笑）

城ですか！？いいえ、居場所です。

「ま、その説明はのちほどね♪」

「はぁ・・・。」

適当なことですね・・・（汗

「あ、俺らは政府関係者なんだよねえ♪」

「あ、そうなんですか・・・え！？ええええええ！？」

「うっせーな！！お前！！」

「あ、すいません。」

パーカー男に怒鳴られた・・・。

何で俺、俺より年下っぽいのに
怒られてんのだろ・・・。

俺一応、高2なんだけど・・・

パーカー男は中3くらいしかみえない。

「あ、あの、つかぬことをお聞きしますが
名前と年齢だけお尋ねしてよろしいですかね？」

ビ、ビビるな！俺！！

「俺はねえー・・・

No. 1 アルムだよ♪ついでに歳は18の高3でえす♪」

振り向いて

殺気のない笑みを俺に向けるイカれた男。

「あの、なんて呼べば?？」

「アルムでいいよ♪・・・敵じゃないしね。」

「はあ・・・。」

敵じゃないってどういう意味だろ・・・？

「俺はNo.4フェオンだっ!!
歳は15の中3だっ!!」

「ああやっぱり。」

「どーいう意味だコラ!!」

パーカー男は大声でキレる。

いや、うん、身長が・・・ね？

まあ、言わないでおこう。

「で、なんて呼んだらいいですか？」

さっきより少しダルめに言う。

だって所詮は年下でそんなに危なくない。

俺のカンだけど。

「別にフェオンでいい！お前は？」

あーそか。

歳は言ってなかったっけ？

「御月優貴斗。17の高2。」

「優貴斗クンは、いずれ僕らみたいな
ナンバーがつくよ♪」

ナンバー??

「それ、さっきも思ったんですけど
ナンバー1とか4やら・・・それってなんですか??」

「ああ俺めんどくさいから♪
政府のトップにでも聞いて☆」

ええー・・・
ぶん投げっすか・・・。

「はい、着いた♪」

アルムはそう言って足をとめた．．．のは
いいんだけどね．．．

ここはどこ！？

「政府の犬の居場所とでも
言っておこうかな♪」

言っておこうかな♪．．．

なんてそんなノリではついていきません（（汗

さて、このバカでっかい城は
なんですか！？

犯罪者ですか!!・・・違うんです。(前書き)

犯罪者ではないです(笑)

犯罪者ですか!!・・・違うんです。

「ここは・・・??」

「んー俺らが任務遂行までの間
隠れ蓑としてるところかな♪」

任務って

人殺し・・・!?

え、俺そんなやつらに
名前教えちゃったの!?

「さて中に入ろうか♪」

「え・・・?」

「いまさら逃げるわけじゃないよね?♪」

「はい．．．（泣）」

もうやだ．．．（泣）

中に連れて行かれると
古い洋館のような内装である。

案外綺麗．．．。

もつと汚いかと．．．。

そんなことを考えてる俺を無視して
ずかずかと歩いて行く2人。

「君、誰．．．??」

「何言って．．．。」

俺は御月優貴斗ってさっきも

「いったでしょ？」

何回言ったら覚えてくれるのさ。

「ん？なんでもう一回名前言ってるの？」

「はい？フェオンが聞いてきたんじゃ・・・？？」

「俺もアルムもさっきから一言も話してないし。」

「じゃあ名前聞いてきたのは・・・。」

俺は言いながら後ろを振り向いた・・・
黒ずくめの男がいた。

「なんかいたあああああ！！！！！！！！」

大声で叫ぶ。

「お前うるさいっ!!」

「だ、だってなんかいる!!」

「んー? ♪」

アルムは不思議そうに俺の後ろをみる。

「あ、こんなところにいたの♪」

「え?」

「あ、ほんとだ。こんなところにいたのかー。」

「え?」

なになに．．．。

知り合いですか．．．??

この明らかに犯罪者っぽい身なりをした
黒ずくめは誰ですか!?

犯罪者ですか!!・・・違うんです。(後書き)

さて次で名前がわかります・・・

犯罪者身なりの人のね!!
(笑)

俺は一体何者!?!... さてなんでしようか。(前書き)

遅くなりましたっ

俺は一体何者!?!?・・・さてなんでしょうか。

「えっと・・・誰?」

「あ、僕はN O. 12スキアです・・・。」

「はぁ・・・。」

黒い塊・・・もといスキアは
ぼそぼそと話す。

「スキアはね、この中でのトップ♪」

「へえー・・・って、はぁ!?!?」

トップってこれが!?!?

殺しのトップが黒い塊でいいの!?!?

それでいいの!?!?

「ってことでスキアに詳しいことは聞いてね♪」

わーお、やっぱ丸投げ☆

「あの、スキアさん。教えてもらっていいですか？」

「あ、はい。でも、その前に・・・。」

普通の人間が何故ここにいる・・・？」

ビクッと自分の体が反応したのを実感する。

なんで・・・。

さっきまで全く恐れなどなかったのに
急に殺気ある声色になってる・・・。

なんなんだ、ここは？

アルムもそうだ。

俺に何者か聞いてきたとき
急に威圧感のある声色に変化していた。

ここにいるみんなは
みんなこうなのか・・・？

何か特殊な能力を
持ち合わせたイカれた人間達が集まっているのか・・・？

「何者だ・・・？」

「・・・お・・・れは・・・」優貴斗は俺らの物質系能力を
打ち消す消去化させる特異体質だ。」

必死で声を出そうとしている俺に
フェオンが助け舟をさしだしてくれる。

ただ言ってることは
俺には理解できないものだった。

初めて耳にはいる言葉。

物質系能力。

打ち消す消去化。
特異体質。

なんだ？

俺は一体なんなんだ！？

一体・・・。

俺は一体何者!?!... さてなんでしようか。(後書き)

みなさん案外こわいっす(笑)

何を意味するのか。．．．俺らすべてが表れる。(前書き)

サブタイトル意味不明です(笑)

何を意味するのか。．．．俺らすべてが表れる。

「．．．ふーん．．．そっかあ。」

え？

急に返事が柔らかくなる。

「敵じゃないんだね。」

「ああ、逆に役に立つ人材だぞ。」

「なら、いいや。」

「よろしく、御月優貴斗くん。」

にっこり穏やかな微笑みを
みせるスキアさん。

「なんで名前を知って．．．。」

「さっき聞いたからね。」

あ．．．そっか。

「本題に入らないの？♪」

「あ、そうだね。」

本題．．？

「さて、優貴斗くんに説明でもしていこうか。」

．．．？

ナンバーについてか．．？？

「俺ら、政府の犬。」

”Bloodkiller”について．．ね？

「Bloodkiller．．。」

B l o o d 〓 血
k i l l e r 〓 殺し屋

一体 B l o o d k i l l e r とは
何を表わすんだ．．．。

なんの象徴なんだ．．．？

何を意味するのか。．．．俺らすべてが表れる。
(後書き)

やつと説明突入(笑)

ゲーム世界ですか!?! . . . いえ、リアルです。(前書き)

なんかサブタイトル
毎回おかしいよね(笑)

ゲーム世界ですか!?!?… いえ、リアルです。

「”Blood killer”は簡単に言えば政府に雇われてる殺し屋みたいなものだけど…。」
ただ、無差別に人を殺してはいないんだ。」

…政府。

政府は殺し屋を雇うのか…?

「殺すターゲットは人間ではない人間になります禁忌を犯した”妖魔”。」

「妖魔…?」

何だそれ?

初めて聞いたぞ、そんなの。

しかも禁忌って何だ…?

「ま、普通の人には感じられないし、知らなくて当たり前だね。」

妖魔は姿や形が変えられる自由自在な妖怪みたいなものってところかな。」

「妖怪・・・！？」

「まあ、妖怪ってより妖あやかの存在に近いかな。」

「へえー・・・・・・・・・・。」

次元がわかんないんだけど！？
なにここ！？俺、日本にいたよね！？
何でファンタジー！？RPGか、これは！？

「んで、禁忌は禁じられること。」

ことをサクサクと進めるなあ！！（汗）

「禁じられることとは何ですか・・・？」

もう、現実逃避したい・・・（泣）

「それは・・・。」

「それは・・・？？」

「人を喰らうこと。」

は．．．??

喰らうって．．．。

人、食べんの!?

はあああああああああああああ!?!?!?!

「最早次元が違うよ!!」

「ううん。これが現実だよ。」

スキアさんは神妙な顔をして
俺をまっすぐとみすえた。

これが．．．現実?!!??

誰か嘘だと言って下さいっ!!!(泣)

ゲーム世界ですか!?!...いえ、リアルです。(後書き)

どーでしたか? (笑)

これでも一応親真剣に練ってます (笑)

俺は人間でしょ!?! . . . いえ、ちょっと違います。(前書き)

遅くなりましたっ!!

ここんとこ説明の章ですね

俺は人間でしょ!?!?・・・いえ、ちょっと違います。

「これが現実だよーん♪」

アルムにハイテンションで
現実を突きつけられる。

「マジで・・・?」

「嘘つくバカがどこにいんだよ!!」

「フェオンとか。」

「何だとコノヤロー!!」

現実なんだ・・・。

こんなRPGみたいのが・・・。

「信じられなくても当たり前かな。
優貴斗くんは”今は”人間だから。」

スキアさんのいうことに
少し引かかる。

今は・・・？

「今はって・・・ずっと俺、人間ですが・・・？」

「あー・・・うん。僕らを知った以上
多分完璧な人間ではなくなる・・・かな。」

スキアさんは苦笑しながら言うけど
俺にとって全く笑える話じゃない。

人外って・・・人外って・・・!!!!!!

「あは♪仕方ないよ♪
俺らもだもん♪」

「簡単に言うなよおおおお!!」

「言っちゃうよ?」

屈託のない笑みを俺に向けるな!!

人事だと思いやがって・・・(泣)

「ま、ここにいる僕ら、もといBloodkillerのNo. 1からNo. 12は完璧な人間ではないということだよ。」

No. 1からNo. 12って・・・。

「そんなにいっぱいいるの!?!」

「いるよ」

「人外が!?!」

「人外っていうかちょっとした不死身になって特殊能力もちになるんだよ。」

にこやかに
スキアさんは話す。

でもそれって

完璧に人外ですからああああ！！！！！！！！

「俺、人外やだああああ！」

俺は一体何になるんだあああああ！！！！！！！！

俺は人間でしょ!?!? . . . いえ、ちょっと違います。(後書き)

色々なんか複雑な設定に. . . (汗)

難しい. . . (汗)

着物少女現れた!?! . . . いえ、少女では . . . 。 (前書き)

遅くなりましたっ!!

着物少女現れた!?!?…いえ、少女では…。

「ま、そんなわけで。」

「はあ…。」

いまいち納得できない。

「あ、それとここにいる3人だけだけど能力を見せとくよ。そのほうが信じられるでしょ?」

「あ、はい。」

なんて親切なスキアさん…。(泣

…信じたくないけど。

「んじゃ、俺から♪」

アルムはペロツと舌舐めずりをする。

「よっと．．．。」

「!？」

俺は驚愕した。

．．．何故身体から銃が．．．？

いや正確に言うとなんか胸らへんから銃が．．．。

「俺はNo. 1アルム、武器使いだよ♪」

「使いつて・・・一体化してんじゃん!!」

「ああ、うん♪そーだよ♪」

軽く言うけど普通ではありえない光景だ。

「俺の能力は武器を取り込み一体化させ自由に操ること☆」

おちやめにいわれても・・・。

「じゃ次は俺な。」

フェオンは「よしっ」と気合をいれる。

「風よ。かまいたいよ。今呼び起こせ!!」

そう言いながら手を上に掲げると
フェオンの周りは風で纏われる。

「俺、No. 4 フェオンは能力は風使い。」

「風かー……。」

「風よ、纏い消え失せろ。」

そういうと風はふっと消えていった。

呪文があるんだー……。

「じゃ最後は僕で。」

スキアさんは黒いマントで顔が隠されるのだが……

ってなんじゃこりゃー！！！！！！

きっと俺の顔はムンクの叫びのようになっているだろう。

イ．．．イケメンすぎる．．．。

「．．．ん．．．？どうかした．．．？」

「あ、いえ．．．。」

何だろう。

男として負けた気がする．．．。

考えたらアルムもフェオンもイケメンだ．．．。
俺だけ！？俺だけなの！？こんなにも敗北感を感じるのは！！

「さあ、いでよ。俺の守護。」

そう静かに言い放ってすぐに
スキアさんの周りには影が現れる。

か、影・・・???

「形となり目の前に現れる。」

そういうと影がむくむくと・・・って、え!?

「り、立体化してる!？」

「うん。僕、No. 12スキアは影使い。」

「影・・・。」

ある意味無敵じゃん．．．。

「こんなところかな．．？」

スキアさんは静かに「消えろ、守護。」
と言ってまたマントを被る。

「何の話ですの．．？」

後ろから凜とした声がきこえる。

振り向くとそこには

・・・着物少女がいた・・・。

ってはあああああああああ！？

何故急に和風な少女があああああ！？

着物少女現れた!?!? . . . いえ、少女では . . . 。 (後書き)

なんかまたでてきました (笑)

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9672y/>

Blood killer

2011年12月25日06時46分発行